

図表2 否定的な心理の類型

類型	項目
①時間不足感、精神的余裕の不足感	「自分の自由な時間が持てない」 「仕事や家事が十分にできない」 「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」 「目が離せないので気が休まらない」 「子育てによる身体の疲れが大きい」
②制度の不足感	「子どもの預け先の不足」 「急病の時の医者が近くにいない」
③経済的負担感	「子育てで出費がかさむ」
④家族間の項目 ・配偶者の参加不足感 ・家族内で子育て方針の不一致	「配偶者が育児に参加してくれない」 「しつけのしかたが家族内で一致しない」
⑤子どもの行動・育ち	「子どもが言うことを聞かない」 「子どもの成長の度合いが気になる」 「子どもについてまわりの目や評価が気になる」 「しつけのしかたがわからない」 「子どもが病気がち」 「子どもが保育所・幼稚園に行きたがらない」

出典：筆者が作成

3. 母親の就業状況別

負担に思うことや悩みの上位10項目を示したのが図表3である。

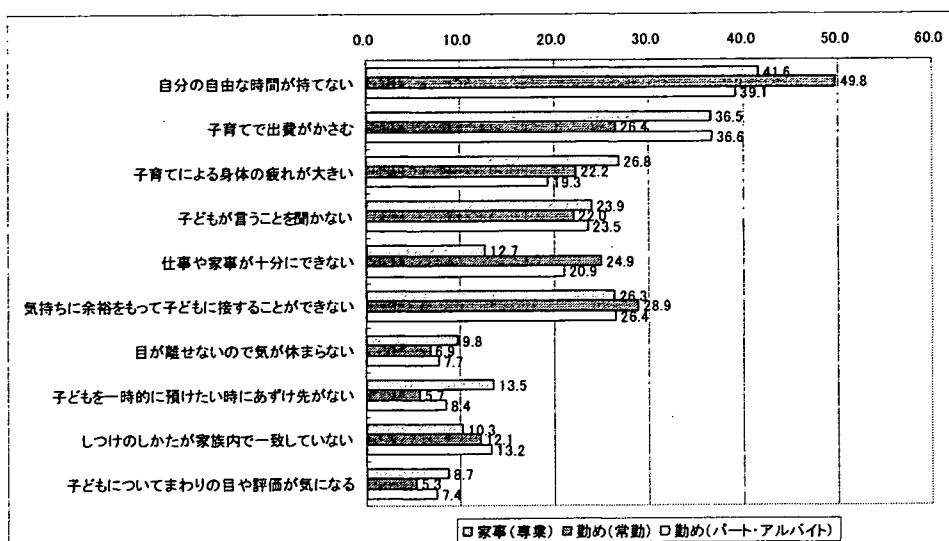
まず、常勤層で顕著に高く出ているのが、「自分の自由な時間が持てない」(49.8%)、「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」(28.9%)、「仕事や家事が十分にできない」(24.9%)である。時間不足感、精神的余裕の不足感が高く出ているのが常勤層であるといえる。

第二に、一時保育の制度不足感は専業主婦で最も高く、「子どもを一時的に預けたいときにあずけ先がない」(13.5%)となっている。また、「子育てによる身体の疲れが大きい」(26.8%)も最も高い。

第三に、経済的負担感については、パート・アルバイト層と同程度であり、専業主婦層で36.5%、パート・アルバイト層で36.6%となっている。

以上より、「専業主婦が就業する母親よりも育児不安が高い」というよりはむしろ、専業主婦、パート・アルバイト、常勤層の間で、育児をめぐる否定的な心理のあらわれ方が異なる、としかえした方がよい。

図表3 就業別に見た育児負担感（第5回）



4. 変化の様相

では、第1～5回目を通じてどのような変化が見られるだろうか（図表4・5）。いいかえれば、子どもが6ヶ月から4歳半と成長する中で、母親の育児に関する心理はどう変化するのか。

まず、「自分の自由な時間が持てない」は、第1回～第2回 家事(専業)、勤め(常勤)、勤め(パート・アルバイト)それぞれ上昇傾向にある。しかし、第4回以降 家事、勤め(パート)は減少し、一方、勤め(常勤)は高水準で推移している。

第二に、「子育てによる身体の疲れが大きい」については、第1回～第3回で、家事が勤め(常勤)、勤め(パート)を上回っている。

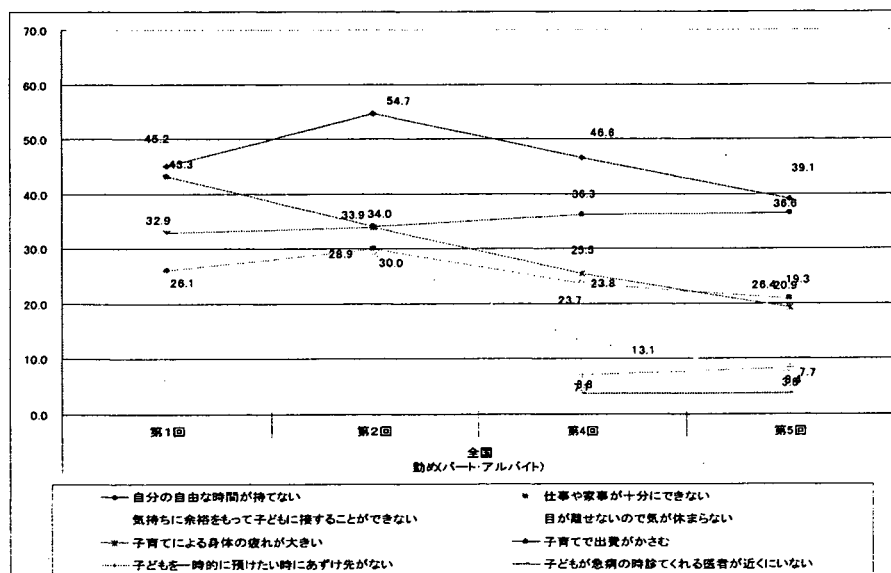
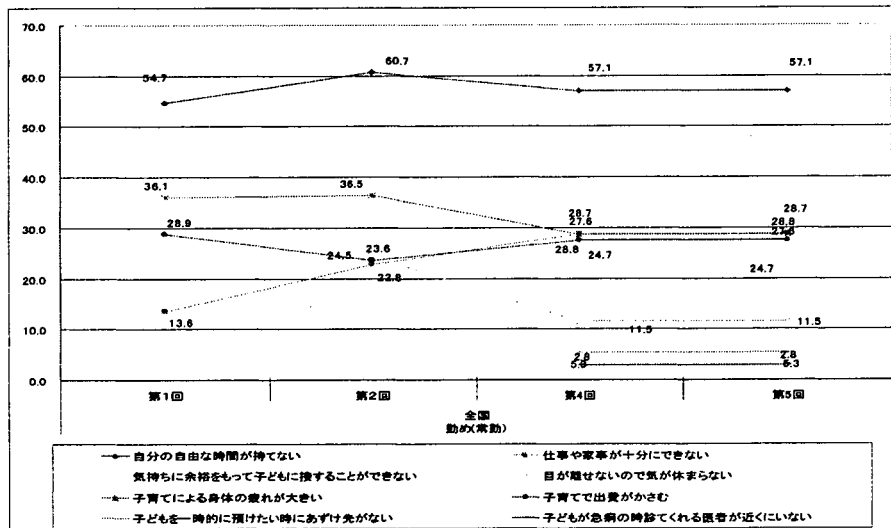
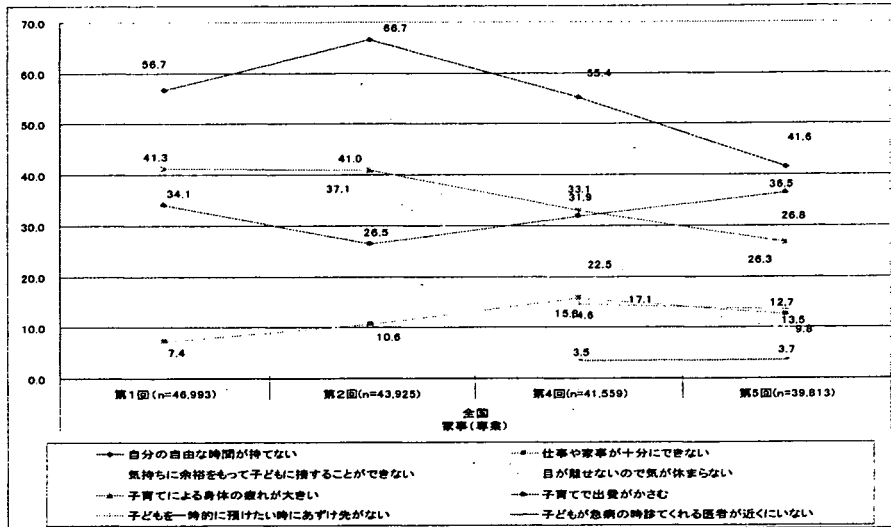
第三に、「子どもを一時的に預けたいときに預け先がない」については、第4回～第5回家事層が勤め層を上回っている。

第四に、「仕事や家事が十分にできない」について、第1回～第5回家事層は一貫して低い。一方で、第1回～第2回勤め(常勤)層は勤め(パート)層より低い水準にある。これは育児休業のためとも推測される。そして、第4回～第5回勤め(常勤)層の負担感の水準は勤め(パート)層よりも高くなる。

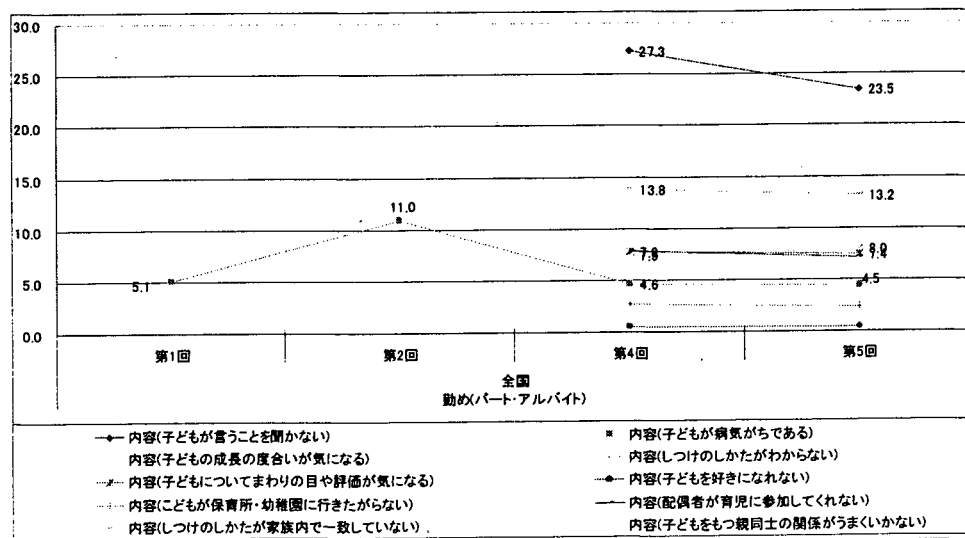
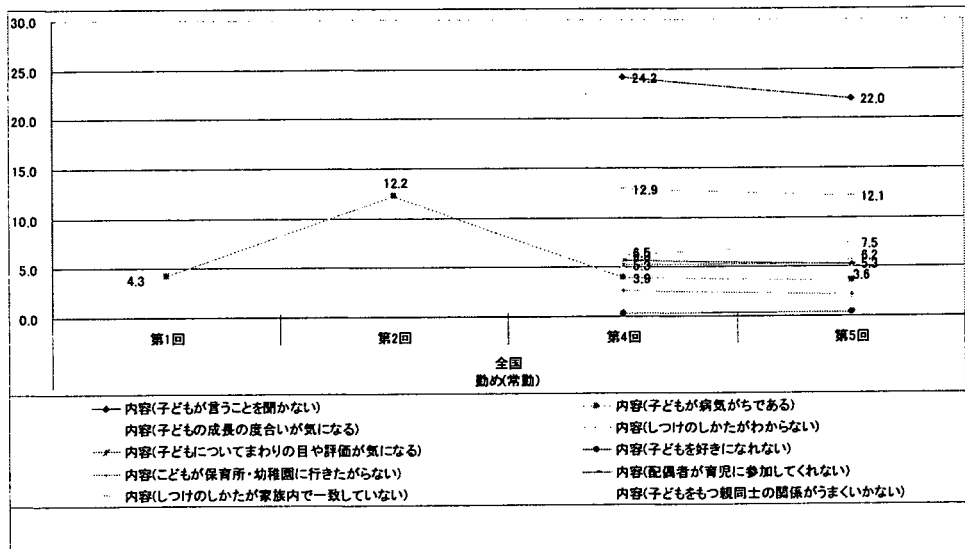
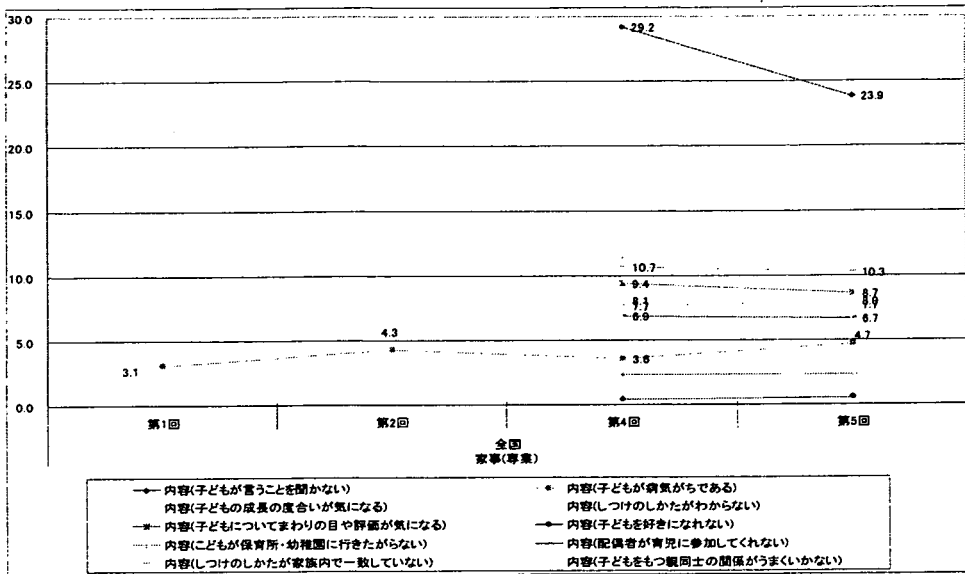
第五に、「子育て出費がかさむ」について、勤め(パート)層の負担感が高水準で推移(35%) 勤め(常勤)層の負担感25%～30%で推移している。

このように、専業主婦、パート・アルバイト、常勤層の間で、育児をめぐる否定的な心理のあらわれ方が異なっている。「専業主婦が就業する母親よりも育児不安が高い」というよりはむしろ、女性の就業状況別に、その否定的な心理が異なる点に着目したい。例えば、時間的不足感常勤層で高い傾向にある。また、制度の不足感(預け先)は家事層が高い。そして経済的負担感パート層で一定水準の高さを保っている。こうした就業別の負担感の違いにも着目した議論が必要ではないだろうか。

図表4 就業別に見た育児負担感の変化-1 (第1~5回)



図表5 就業別に見た育児負担感の変化-2 (第1~5回)



では、専業主婦か、働いているかという二分法ではなく、収入別や国籍別に見るとどのような特徴があるだろうか。

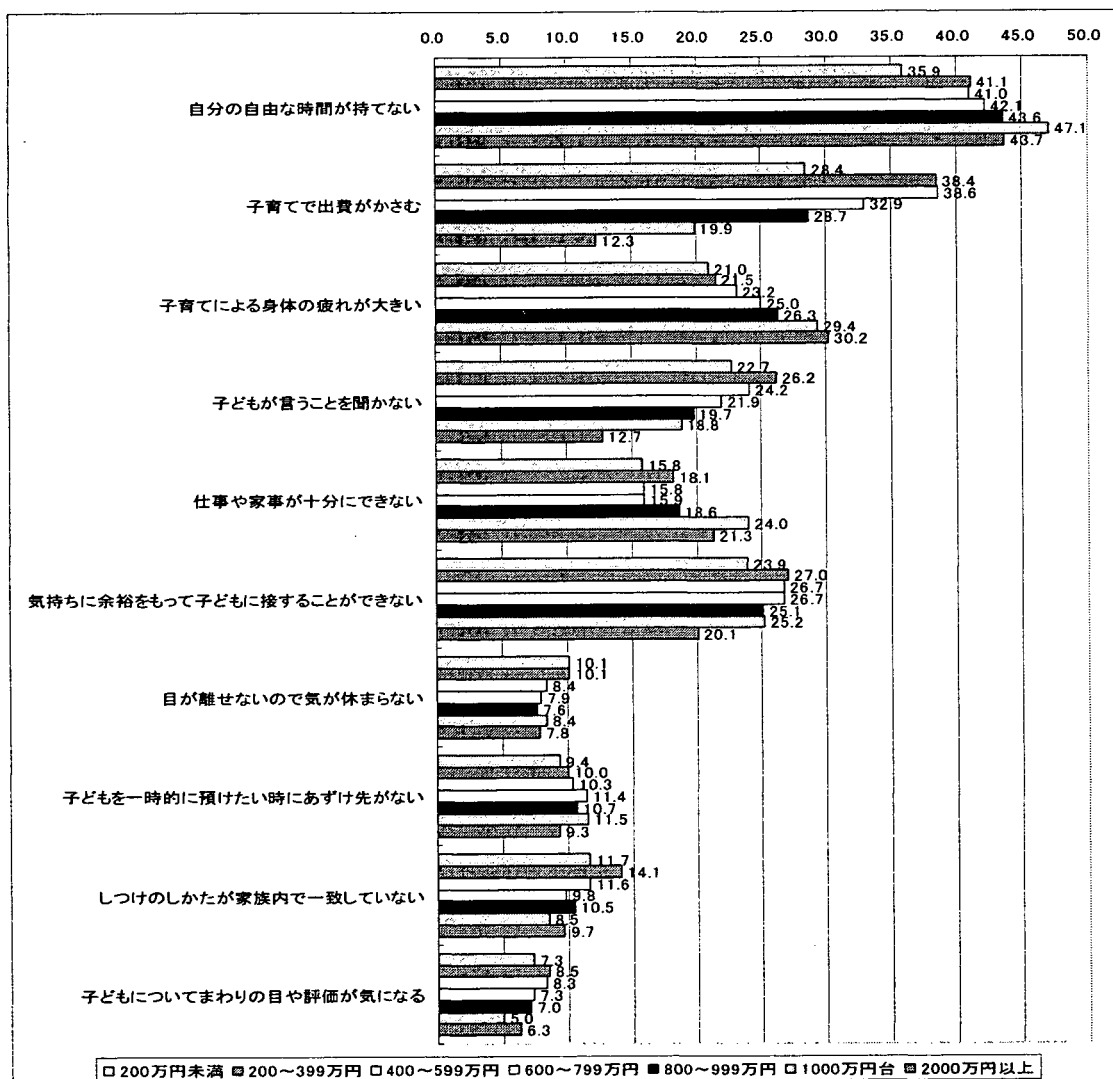
5. 親の収入別

親の収入別に子育て負担の実態を見ると、次のような特徴がある。

第一に、所得があがるほど負担感が高くなっているのは、「子育てによる身体の疲れが大きい」である。また、「自分の自由な時間が持てない」「仕事や家事が十分にできない」についても、年収2,000万円以上で下がるものの、年収1,000万円台までは、所得があがるほど負担感がほぼ高くなる傾向を示している。

第二に、逆に所得がさがるほど負担感が高いのは、「目が離せないので気が休まらない」(年収200万円未満10.1%)である。

図表6 所得別に見た育児負担感(第5回)



第三に、年収 200～399 万円未満の層で最も高く出ているのは、「気持ちに余裕を持って子どもに接することができない」(27.0%)、「子どもが言うことを聞かない」(26.2%)、「しつけのしかたが家族内で一致していない」(14.1%)、「目が離せないので気が休まらない」(10.1%)、「子どもについてまわりの目や評価が気になる」(8.5%)である。「子育てで出費がかさむ」(38.4%)も、年収 400～599 万円の層(38.6%)と 0.2 ポイントの僅差であるが、非常に高くなっている。

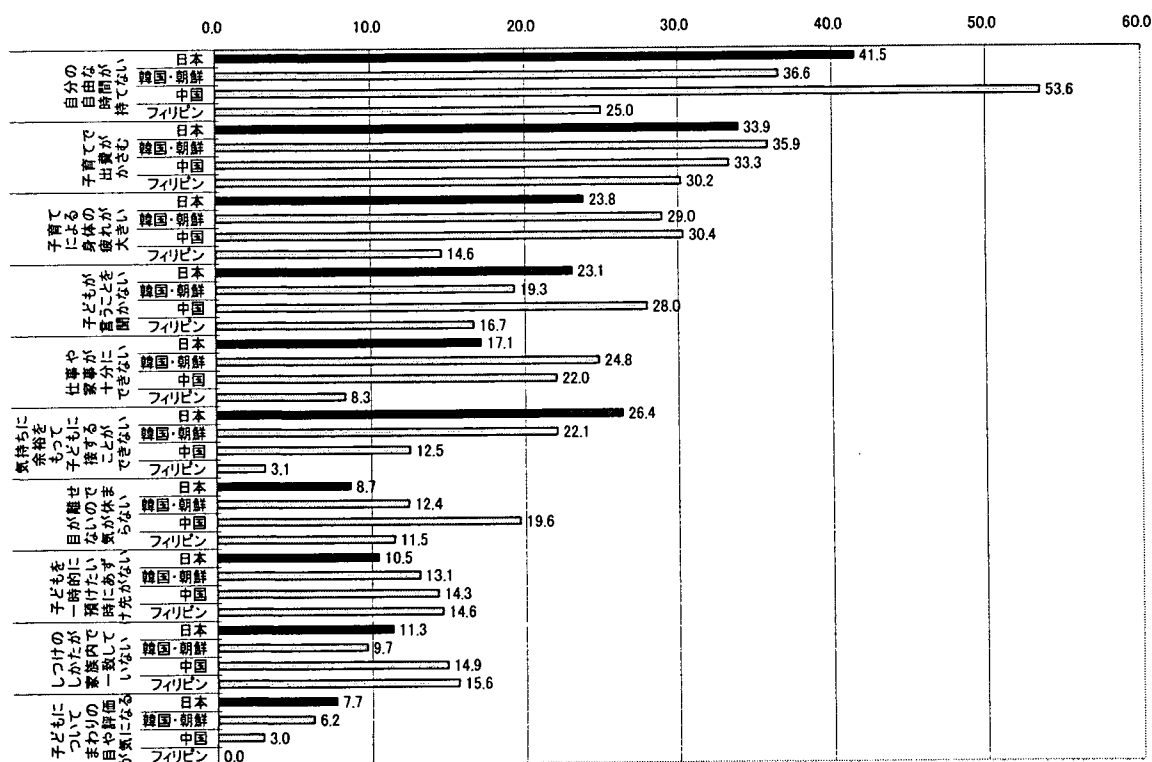
6. 母親の国籍別

全体のサンプルとしては、日本国籍の母親が 39,324 人、韓国・朝鮮籍が 145 人、中国籍が 168 人、フィリピン籍が 96 人である。母親の国籍別に見るとまた異なった特徴が浮かびあがってくる。

第一に、日本国籍の母親で最も高く出ているのが、「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」(26.4%)、「子どもについてまわりの目や評価が気になる」(7.7%)である。

第二に、全体の傾向としては、中国人国籍の母親の育児負担感が高く出ている。「自分の自由な時間が持てない」(53.6%)、「子育てによる身体の疲れが大きい」(30.4%)、「子どもが言うことを聞かない」(28.0%)、「目が離せないので気が休まらない」(19.6%)である。

図表 7 親の国籍別に見た育児負担感 (第 5 回)



第三に、韓国・朝鮮籍の母親で最も高いのが、「子育てで出費がかさむ」(35.9%)、「仕事や家事が十分にできない」(24.8%)である。フィリピン籍の母親で最も高いのは、「子どもを一時的に預けたい時に預け先がない」(14.6%)、「しつけのしかたが家族内で一致していない」(15.6%)である。

7. おわりに：「専業主婦か、働いているか」の二分法を超えて

これまでの育児不安論では、専業主婦か、働いているかという視点からの議論が中心だったが、第5回までの出生児調査をもとにすると、「専業主婦が就業する母親よりも育児不安が高い」とはいえない。むしろ、専業主婦、パート・アルバイト、常勤層の間で、育児をめぐる否定的な心理のあらわれ方が異なっている、といいかえた方が実態を正しく捉えている。

就業別にみると、精神的余裕の不足感、時間的不足感は常勤層で高い傾向にある。また、制度の不足感（預け先）は家事層が高い。そして経済的負担感はパート層で一定水準の高さを保っている。こうした就業別の負担感の違いにも着目したい。

また、精神的余裕の不足感（「目が離せないのが気が休まらない」）は、年収 200 万円未満でもっとも高く、所得がさがるほど負担感が高い。他の精神的余裕の不足感（「気持ちに余裕を持って子どもに接することができない」）も、年収 200～399 万円未満の層で最も高く出ている。さらに、国籍別にみると、中国人の母親の育児不安感が高く出ている点も特徴的である。

今後、「専業主婦か、働いているか」という視点からの育児不安論を超え、所得や国籍も含め、母親の多様な側面、多様な状況に即した育児不安の議論が必要である。そして、子育て中の女性の子育て支援ニーズも、「専業主婦か、働いているか」という二分法よりはむしろ、就業別、所得別、国籍別といった側面から、そのニーズを把握し、政策対応を見直していくことが重要だと考える。

(5) 「出生児縦断調査」による子ども観の分析に向けて
— 「どのような子に育て欲しいか」の分類および規定要因分析 —

元森 絵里子

1. 問題関心

家族や子どもに関する研究ですでに指摘されているように、「子ども」に対するまなざしは、家族の出生行動や育児行動に関係する。「教育家族」の誕生という形で議論されるように、歴史研究は、大正期から昭和期にかけて、新中間層を中心に、少なく産んで、愛情を注ぎ、教育投資をするような家族層が現れてきたことを明らかにしている(沢山 1990; 広田 1999; 小山 2002)。このような家族は、沢山(1990)の議論に修正を加えた広田(1999)によれば、子どもの純真さや無垢を賛美する「童心主義」、早くから厳しくしつけや道徳教育を行って規律を身につけさせようとする「厳格主義」、知識を習得させ学歴をつけさせようとする「学歴主義」の3種類の「〈教育的配慮〉」に関する心性を併せ持っていたという。そして、このような「教育する家族」は、学校教育を媒介に、「子ども」を国家秩序の中に組み入れていく役割を果たしていたということも、しばしば指摘される(小山 2002)。

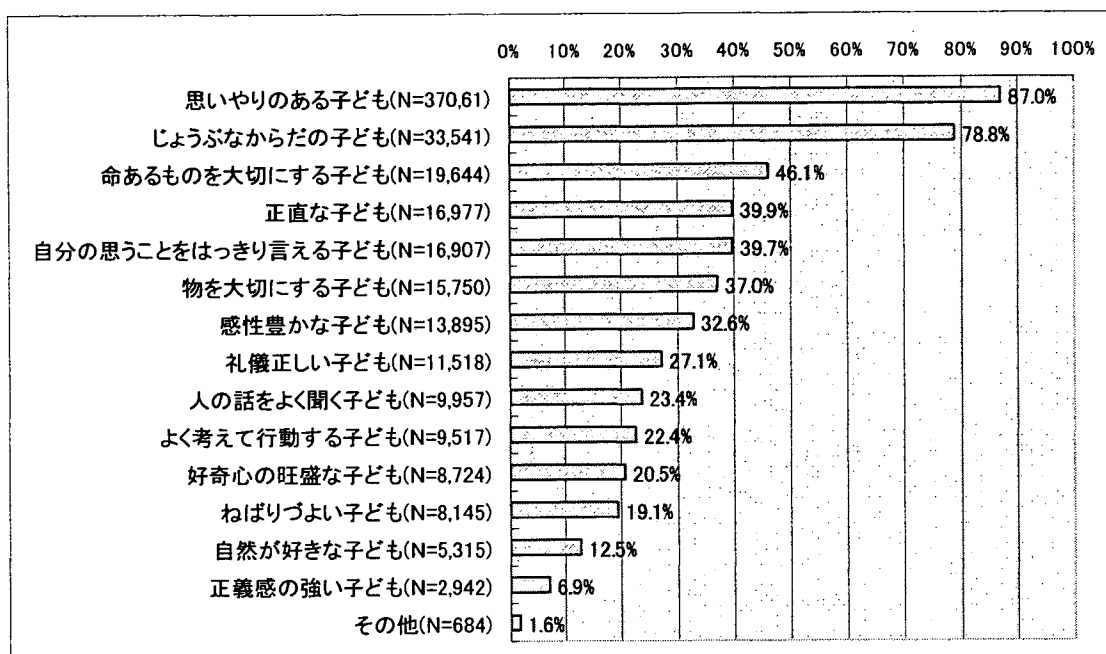
このような「教育する家族」は、現代においても裾野を広げながら存在している。しかし、社会的背景の変化によって、このような状況には変化が訪れていることも指摘されている。このような家族の子ども観は、産児制限をして少数の子どもをしっかりと育てるという出生戦略と結びついている。子どもを「授かる」時代から「つくる」時代へ(沢山 1987)という形で描かれるこの変化は、そもそも、母性愛イデオロギーとして働き、育児負担、育児不安の源泉ともなっているという。近年ではとくに、女性の自立や権利主張と関係して、自分の人生の充実と手厚い子育ての間で「ダブルバインド」状況に置かれる母親の状況も指摘されている(江原 2000)。また、柏木(2001)によれば、現代は、子どもを産むのが「自然」で「社会のため」だった以前に比べ、「条件次第」で「自分のため」である時代になったという。このような変化の中で、子どもの権利論や自己決定の強調などが後押しする形で、「子ども」の価値を「家族」や「社会(国家)」に帰結させずにそれ自体で自明なものとする価値観が強まる一方で、少子化対策や少年非行の問題等の文脈で、「子ども」の価値の社会性を強調する議論(「子は社会の宝」、「次代を担う青少年」!)も耐えない。

すなわち、「子ども」は、その価値に対する家族の心性を媒介にして、学校を経て成人することで、社会(国家)に位置づけられていた。それが、個々の養育者にとっての「子ども」の価値自体が変化し、それに伴って、家族の形や「子ども」と社会(国家)との関係性に変化が起きていると考えられる。

「21世紀出生児縦断調査」(以下、出生児調査)には、第3回に「平成13年1月/7月生まれのお子さんはどのような子に育て欲しいと思いますか。次のうち、特に重視した

いもの5つまでを選んでその番号に○をつけてください」(問14)という設問がある(単純集計の結果を図1に掲載)。この設問の各子ども観をどのような家族が選択しているか、それが育児行動等とどう関係しているかを確認し、既存の子ども観研究の中に位置づけられないだろうか。というのは、仮に本縦断調査の経過とともに、家族の教育戦略や子ども自身の価値観や人生観を追跡調査することができれば、それらと出生児が2歳半の時点の子ども観の関係性を見ることで、「子ども」像が、どのような家族の戦略と結びついて、どのような形で「社会」に位置づくのか(位置づかないのか)を、パターン分けなどしながら追跡できるかもしれないと考えるからである。本稿は、そのための基礎的なデータの整理と既存研究との関係を探る作業を行いたい。

図1 第3回問14単純集計(多重回答)



以下では、まず、似たような設問項目を持つ「日本人の国民性調査」や青年や成人を対象とした大規模社会調査との比較を通じて、本調査項目の特徴と限界を明らかにする(2.)。具体的な分析を行う。次に、大まかな回答傾向を確認しながら、子育て家族の子ども観の情報をコレスポネンス分析によって4分類へと集約することを試みる(3.)。その上で、それらと家族の基本属性との関係を確認する(4.)。それによって、上述の分類と先に見た既存の子ども観研究との関係性をさぐり、「出生児調査」に基づいた子ども観研究の試みがある程度妥当なものであることを確認する。最後に、子ども観の分類を用いた育児行動の分析事例として、しつけの方法との関係性の分析を行う(5.)。

2. 出生児縦断調査の位置

「出生児調査」の第3回調査問14「どのような子に育てて欲しいと思いますか」は、図1にあげられた15項目の中から、当てはまるものを5つまで選択する設問である。その設問項目は、2歳半の幼児に対して保育者が願うような諸項目が多岐に渡って羅列されている。それは、子育て家庭の実感に近い言葉で尋ねられている分、包括的にそのリアリティを再現できる一方、項目設定がアドホックで体系立った分析がしにくいという欠点を持っているようにも思われる。

また、既存の調査との対応も希薄である。その中で設問や項目が比較的近いのが、1953年より5年ごとに実施されている、総務省統計局「日本人の国民性調査」（以下、国民性調査）の第10回（1998年）および第11回（2003年）の、子どもの将来像を尋ねた設問（「子供がいるとしたら、あなたは、将来、どのような性質を持つ大人になってほしいと思いますか。つぎの中から、特に重要と思うものを3つ選んでください」）である。本調査項目との差異は、大人になったときの理想を尋ねている点、3つまでの多重回答である点、子どもの年齢が統制されていない点である。

「国民性調査」（第11回）の項目および回答率¹に、「出生児調査」の対応する項目および回答率を並べてみたのが表1である。多重回答であること、両調査とも累積%から判断する限りにおいて大半が選択可能な項目数の上限まで選択していることから、選択可能な項目数の上限の値で割った値も併記しておいた。それによると、似た項目に関しては、若干の変化はあるものの、似たような傾向が読み取れる。その点で、出生児調査の結果は妥当なものであり、一般的な傾向を表していると判断してよいだろう。対応していない項目を見ると、「国民性調査」では自立や公共心に関わる項目が多いのに対して、「出生児調査」では感性や協調性に関わる項目が多い。このような選択項目の設定の差異自体が、調査者が図りたい「大人」性と「子ども」性の差異を表しているようにも思われる。子ども向けの出生児調査にも自立や公共心に関わる項目を入れたらどうだろうか。また、冒頭の広田（1999）の分類に戻れば、「童心主義」的な感性に関する項目や協調性や礼儀などの「厳格主義」的な項目に近いものはあるが、「学歴主義」的な項目はない。対象児が2歳半であったことを考えれば、そのような項目は尚早なのかもしれないが、例えば、知識欲や他の子に比べた早熟度などに関する項目などを入れておくことはできたかもしれない。時系列的な変化の分析を可能にするような項目設定や、他の調査との対応関係のあるものにすれば、データの利用に幅が出たように思われる。

同様に、人々の生き方の質や社会との関係性意識について聞いた伝統的な調査に、NHK放送文化研究所が1973年から5年ごとに行っている「日本人の意識調査」（1973～5年ごとに実施）の「生活目標」に関する項目がある。そこでは、感性志向か理性志向か、自己中心か社会中心かの2軸を組み合わせることで、「その日その日を、自由に楽しく過ごす」（快

¹ http://www.ism.ac.jp/kokuninsei/data/html/ss4/4_16_all.htm（統計数理研究所、国民性調査、単純集計表、#4.16 子供の将来の性質、2007年10月27日アクセス）

志向＝感性×自己)、「しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く」(利志向＝理性×自己)、「身近な人たちと、なごやかな毎を送る」(愛志向＝感性×社会)、「みんなと力を合わせて、世の中をよくする」(正志向＝理性×社会)の4項目を尋ねている。周知のことながら、この調査項目には分析事例が蓄積されているし²、似た設問項目を用いた調査もしばしば行われている。例えば、内閣府が1970年から1990年にかけて5年ごとに行っている「青少年の連帯感調査」と、その後継調査とも言うべき1997年、2002年の「青少年の生活と意識に関する基本調査」には「人生目標」を、「その日、その日を楽しく生きたい」、「身近な人との愛情を大事にしていきたい」、「自分の趣味を大切にしていきたい」、「経済的に豊かになりたい」、「社会や他の人々のためにつくしたい」、「良い業績をあげて、地位や高い評価を得たい」という項目で尋ねている。これらを子ども用に修正したような項目を聞くことで、親世代の自らの生活に関する意識と子ども観の関係性などへと分析や、子どもの加齢に応じた期待の変化の分析などへと展開ができたのではないだろうか。

とはいえ、あえてないものねだりを書いたが、すでに調査済みの第3回調査の分析からも、多くのことを言えるように思われる。そこで、以下では、これらの既存の調査や家族と子ども観に関する先行研究との関係性も視野に入れつつ、当該設問の回答結果の分析を行う。

表1 「国民性調査」と「出生児調査」の項目比較

国民性調査の設問	%	/3	出生児調査での対応項目	%	/5
1 礼儀正しさ	40%	13.3%	礼儀正しい子ども	27.1%	5.4%
2 規則を守り、人に迷惑をかけない公共心	59%	19.7%			
3 公正さや正義感	16%	5.3%	正義感の強い子ども	6.9%	1.4%
4 他人のことを思いやる心	68%	22.7%	思いやりのある子ども	87.0%	17.4%
5 落ち着きや情緒の安定	10%	3.3%			
6 責任感	46%	15.3%			
7 人前で自分の意見をはっきり言う力	27%	9.0%	自分の思うことをはっきり言える子ども	39.7%	7.9%
8 自分で物事を計画し実行する力	24%	8.0%	よく考えて行動する子ども	22.4%	4.5%
9 特になし	0%	0.0%			
10 その他【記入】	3%	1.0%			
DK	0%	0.0%			
計	293%	97.7%			

3. 子ども観の分類の試み

3.1 基本的な回答傾向

当該設問の単純集計は、図1にすでに示したとおりである。この設問は「特に重視したいもの5つまでを選」ぶという条件が付されている。回答の累積パーセントが、494.6%であることから、大半の回答者が上限の5つまで回答したことになる。ただし、6つ以上に○をしたケースもあり、その場合はそのまま集計されている。

² 古典的なものでは、見田(1975→1984)など。

「思いやりのある子ども」が87.0%、「じょうぶなからだの子ども」が78.8%と、健康でやさしい子どもになることを、大半の親が選択していることがうかがわれる。それ以外のもののうち（仮に上記2つ以外が均等に選ばれたと仮定した場合の $100/3=33.3\%$ を基準にすると）答えが多いのは、「命あるものを大切にする子ども」(46.1%)、「物を大切にする子ども」(37.0%)、「感性豊かな子ども」(32.6%)といった自然や環境への感受性や、「正直な子ども」(39.9%)、「自分の思うことをはっきり言える子ども」(39.7%)など素直な自己表出に関わる項目の選択率が高い。これらは、私たちが通常考える子どもらしさを、比較的場限定されない形で表現している項目であろう。「好奇心」や「正義感」、「ねばりづよさ」など、より限定された性格づけをするような項目は選ばれにくいようである。

次に、設問間の相関係数を見たのが、表2である。設問数が多いため値が0.1以下のものが大半を占めるので、値が0.1を超えるものを太字にして示した。大半が負の相関を示しているのは、選択可能数が限定されていることに起因すると考えられる。つまり、負の相関は、相反する志向性の表れとも似た設問を重複して選ぶのを避けたことの表れとも読み取れ、判断が難しいのである。ただし、値がわずかでも正であったものには一定の傾向が読み取れる。例えば、「思いやりのある子ども」×「正直な子ども」、「思いやりのある子ども×命を大切にする子ども」といった多数派同士の組み合わせのほか、「自分の思うことをはっきり言える子ども」×「好奇心の旺盛な子ども」のような自発性を重視する発想、「感性豊かな子ども」×「自然が好きな子ども」、「感性豊かな子ども×好奇心の旺盛な子ども」、「自然が好き×好奇心の旺盛な子ども」といった童心とも呼べるような自然や感性を志向する発想などである。

このように、5つまでの多重回答という設問の制約からくる問題がやや見られるが、何らかの回答の傾向は見られると考えられる。

表2 第3回問14 相関係数

	よく考え て行動す る子ども	じょうぶ なからだ の子ども	正義感 の強い子 ども	思いやり のある子 ども	礼儀正し い子ども	正直な子 ども	自分の 思うこと をはつき り言える	感性豊 かな子ど も	物を大切 にする子 ども	人の話を よく聞く 子ども	ねばりづ よい子ど も	命あるも のを大切 にする子 ども	自然が 好きな子 ども	好奇心 の旺盛な 子ども	その他
よく考えて行動する子ども	1	-0.132(**)	-0.014(**)	-0.107(**)	-0.058(**)	-0.121(**)	-0.010(*)	-0.070(**)	-0.081(**)	0.046(**)	0.01	-0.090(**)	-0.066(**)	-0.067(**)	-0.016(**)
じょうぶなからだの子ども		1	-0.053(**)	0.01	-0.067(**)	-0.036(**)	-0.077(**)	-0.057(**)	-0.071(**)	-0.113(**)	-0.022(**)	-0.036(**)	-0.014(**)	-0.036(**)	-0.019(**)
正義感の強い子ども			1	-0.031(**)	0.00	-0.011(*)	-0.043(**)	-0.049(**)	-0.068(**)	-0.054(**)	-0.010(*)	-0.01	-0.021(**)	-0.022(**)	-0.010(*)
思いやりのある子ども				1	-0.019(**)	0.00	-0.095(**)	-0.019(**)	0.00	-0.057(**)	-0.050(**)	-0.017(**)	-0.077(**)	-0.097(**)	-0.041(**)
礼儀正しい子ども					1	-0.046(**)	-0.100(**)	-0.123(**)	-0.01	-0.01	-0.073(**)	-0.120(**)	-0.066(**)	-0.098(**)	-0.021(**)
正直な子ども						1	-0.146(**)	-0.127(**)	-0.028(**)	-0.048(**)	-0.081(**)	-0.073(**)	-0.073(**)	-0.104(**)	-0.044(**)
自分の思うことをはっきり言える子ども							1	-0.106(**)	-0.132(**)	-0.013(**)	-0.011(*)	-0.106(**)	-0.068(**)	0.024(**)	-0.026(**)
感性豊かな子ども								1	-0.136(**)	-0.119(**)	-0.053(**)	-0.068(**)	0.020(**)	0.082(**)	-0.016(**)
物を大切に する子ども									1	-0.032(**)	-0.124(**)	0.00	-0.040(**)	-0.144(**)	-0.041(**)
人の話をよく 聞く子ども										1	-0.065(**)	-0.104(**)	-0.057(**)	-0.107(**)	-0.022(**)
ねばりづよい 子ども											1	-0.120(**)	-0.050(**)	-0.021(**)	0.00
命あるものを 大切に する子ども												1	-0.016(**)	-0.132(**)	-0.033(**)
自然が好きな 子ども													1	0.024(**)	-0.012(*)
好奇心の旺盛 な子ども														1	-0.013(**)
その他															1

** 1% 水準で有意 (両側) です。

* 5% 水準で有意 (両側)

※ -1以下で有意のものを太字に、+で有意のものを細掛けを施した

3.2 コレスポネンス分析

各項目ごとの家族の基本属性による分布などは、厚生労働省官房統計情報部（2005）にクロス表集計値が掲載されているため、次に本稿では、以上のような回答傾向をよりわかりやすく示し、1.で見た家族研究の子ども観分析の系譜に位置づけることを試みるために、コレスポネンス分析を行う³。当該設問の SPSS Categories15.0 を用いた多重コレスポネンス分析⁴の結果が図3および表3、4である。

イナーシャ（寄与率）が低いものの⁵、2次元まで析出した結果、一定の傾向は読み取れる。図2および表4より⁶、第一次元は、「物を大切にする子ども（該当）」、「正直な子ども（該当）」、「礼儀正しい子ども（該当）」、「命を大切にする子ども（該当）」など、他者や環境に従順で協調性のある子ども像を示すものが高い正の得点であり（逆に、「自分の思うことをはっきり言える子ども（非該当）」、「好奇心が旺盛な子ども（非該当）」などの積極的で自発的な子ども像を否定する発想も上位に来ている）、「好奇心が旺盛な子ども（該当）」、「ねばりつよい子ども（該当）」、「感性豊かな子ども（該当）」、「自分の思うことをはっきり言える子ども（該当）」、「よく考えて行動する子ども（該当）」などの、積極的で自発的な子ども像が高い負の得点を示している（「思いやりのある子ども（非該当）」も負に高得点）。ここから、第一次元は、積極的・自発的か調整的・協調的かという子ども観の差異を表すもののように思われる。

また、第二次元は、「人の話をよく聞く子ども（該当）」、「よく考えて行動する子ども（該当）」、「礼儀正しい子ども（該当）」、「自分の思うことをはっきり言える子ども（該当）」などの得点が正に高く（「じょうぶなからだの子ども（非該当）」、「思いやりある子ども（非

³ コレスポネンス分析（対応分析）は、各ケースおよび各変数の等質性を視覚化する分析手法である。日本語で手に入る解説としては、大隈・馬場ほか（1994）などがある。分析には、SPSS Categories 15.0 を用いた。SPSS の使用方法については、内田（2006）等を参考にした。

⁴ 本設問のような多重回答データ（01 データ）の場合、SPSS Categories 15.0 によって分析するには2種類の方法がありえる。1つは、01 データを下表のようなデータ形式に置き換え、コレスポネンス分析を行う方法である。この方法は、しかしながら、今回のようなケース数が万単位の大規模調査では、容易には適用しがたい。もう1つは、該当=1/非該当=2と数値を置き換え、項目を選択したという情報と選択していないという情報を等価のものと扱い、多重コレスポネンス分析を適用する方法である。今回のような場合、3.1で見たように、5つまでという条件に回答行動が制約されている部分が大きいと考えられ、該当と非該当を同等のものと扱えるかには大幅な留保が必要である。しかしながら、上記のよう前者の方法は現実的に取りがたいことから、今回は後者の方法を用いることとした。なお、実際の分析は【[分析] → [データの分解] → [最適尺度法]】を使用した。

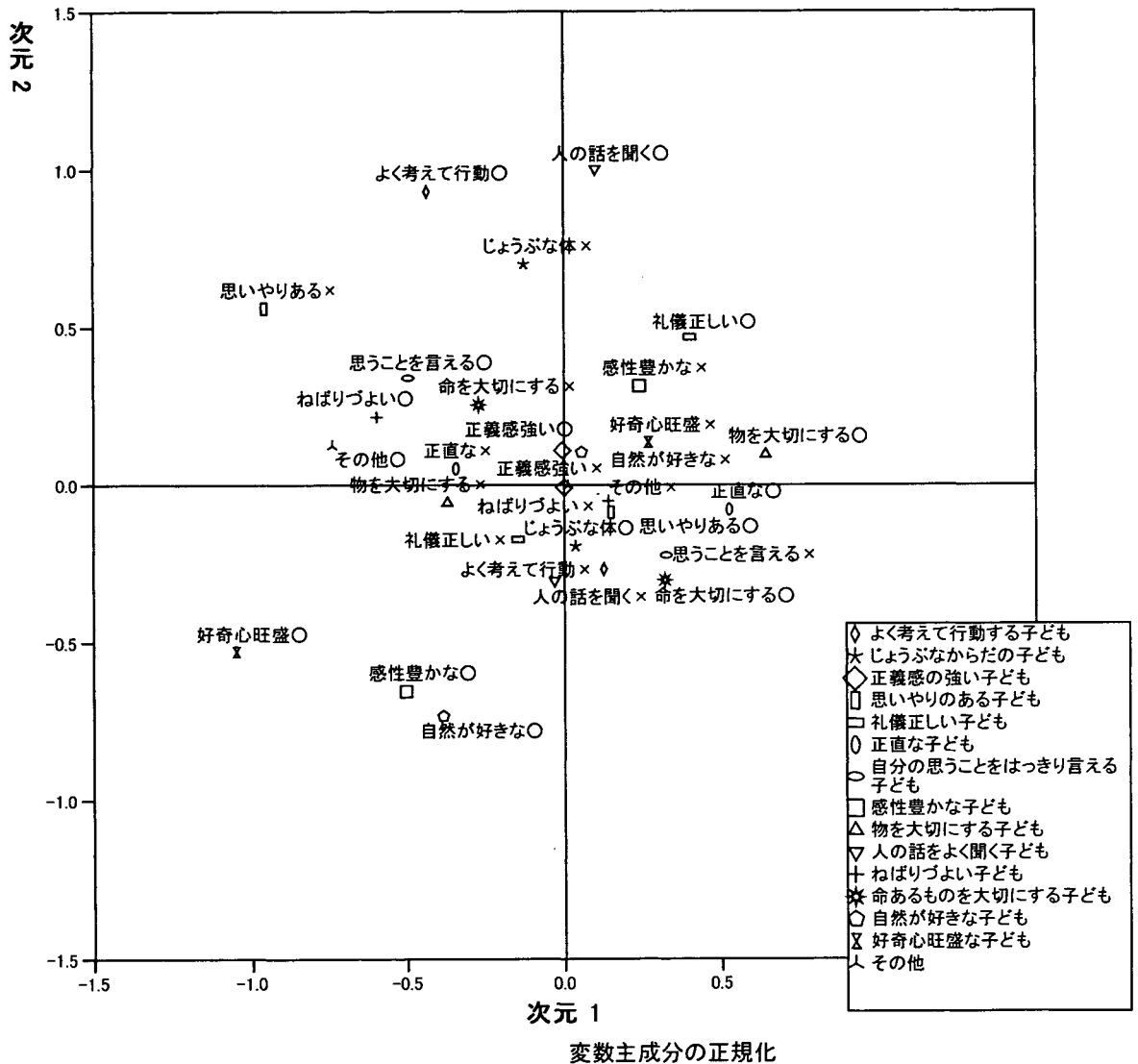
ケース (回答者)	選択肢
1111	1
1111	3
1111	4
1112	2
1112	3
⋮	⋮

⁵ 二値データであるため、一般にイナーシャは高くなりにくい。

⁶ 図中で距離に近いものが似た傾向を持っていることになる。また、原点の周囲には特徴がないものがく

該当)、「感性豊かな子ども (非該当)」も高い)、「自然が好き子ども (該当)」、「感性豊かな子ども (該当)」、「好奇心が旺盛な子ども (該当)」、「命を大切にする子ども (該当)」の得点が負に高い(「人の話を聞く (非該当)」も同様)。前者は判断力や思考力など知的な活動に関係する項目、後者は感性や体に関係する項目と考えられ、第二次元は知性か感性かという子ども観の差異を表していると言ってよいのではないだろうか。

図2 第3回問14の多重コレスpondens分析(カテゴリーの布置図)



※図中の表記は略したもの。各項目○=該当/×=非該当を示す。

表3 第3回問14の多重コレスポネンス分析（固有値とイナーシャ）

次元	Cronbach のアルファ	説明された分散		
		合計(固有値)	イナーシャ	分散の%
1	.334	1.454	.097	9.691
2	.275	1.345	.090	8.966
総計		2.799	.187	
平均値	.306 ^a	1.399	.093	9.328

a. Cronbach のアルファ平均値は、固有値平均値に基づいていません。

表4 第3回問14の多重コレスポネンス分析（数量化得点）

一次元		二次元	
物を大切にする○	0.640	人の話を聞く○	1.002
正直な○	0.526	よく考えて行動○	0.932
礼儀正しい○	0.402	じょうぶな体×	0.701
思うことを言える×	0.325	思いやりある×	0.561
命を大切にする○	0.321	礼儀正しい○	0.468
好奇心旺盛×	0.269	思うことを言える○	0.341
感性豊かな×	0.243	感性豊かな×	0.314
思いやりある○	0.149	命を大切にする×	0.255
ねばりづよい×	0.141	ねばりづよい○	0.217
よく考えて行動×	0.125	好奇心旺盛×	0.135
人の話を聞く○	0.101	その他○	0.124
自然が好きな×	0.055	正義感強い○	0.110
じょうぶな体○	0.035	自然が好きな×	0.104
その他×	0.012	物を大切にする○	0.097
正義感強い×	0.000	正直な×	0.052
正義感強い○	-0.006	その他×	-0.002
人の話を聞く×	-0.031	正義感強い×	-0.008
じょうぶな体×	-0.128	ねばりづよい×	-0.051
礼儀正しい×	-0.148	物を大切にする×	-0.056
命を大切にする×	-0.272	正直な○	-0.079
正直な×	-0.345	思いやりある○	-0.087
物を大切にする×	-0.373	礼儀正しい×	-0.172
自然が好きな○	-0.387	じょうぶな体○	-0.194
よく考えて行動○	-0.438	思うことを言える×	-0.222
思うことを言える○	-0.497	よく考えて行動×	-0.266
感性豊かな○	-0.505	命を大切にする○	-0.301
ねばりづよい○	-0.599	人の話を聞く×	-0.304
その他○	-0.741	好奇心旺盛○	-0.528
思いやりある×	-0.961	感性豊かな○	-0.654
好奇心旺盛○	-1.050	自然が好きな○	-0.733

※表中の表記は略したもの。各項目○=該当/×=非該当を示す。

したがって、以上の分析から、「平成13年1月/7月生まれのお子さんはどうの子に育てて欲しいと思いますか」という設問に基づいて、出生児調査の各ケースを積極的か調整的か、知性重視か感性重視かの2軸を交差させ、4つの子ども観に分類できることになる。前者は児童中心主義と伝統的子ども観、後者は厳格（学歴）主義と童心主義とある程度重なっている部分もあると考えられ、1.で概観したような既存の子ども観研究との接続も可能となるように思われる。

表5は、各ケースを数量化得点に従ってこの4象限に分類したときの度数分布表である。以下では、既存の家族における子ども観の研究との関連性を見る目的も含め、この4分類と各ケースの属性の関係を探っていきたい。

表5 子ども観の4分類（度数分布表）

	度数	パーセント
知性×調整	11377	26.6
知性×積極	9681	22.6
感性×積極	10789	25.2
感性×調整	10962	25.6
合計	42809	100.0

4. 子ども観4分類の規定要因

4.1 クロス表分析

まず、3.で提示した4分類と各ケースの子ども自身や家族に関する基本的情報とのクロス表分析および平均の差の分散分析を行った（表6、7）。子どもの性別、きょうだい（多胎児含む）、子どもの成長状況といったその子どもの状態に関する項目、回答者の子どもとの続柄がケースによって異なるといった出生児調査特有の事情を考慮して回答者が誰か、父母の世代の問題を考慮して父母の年齢、先行研究で検討されていない外国籍の親の問題を見るために父母の国籍といった変数を検討した。加えて、1.で見たように、先行研究では都市中間層、専業主婦とサラリーマンの世帯（ときに核家族）といった要因が子ども観を規定するものとしてあげられていることから、都市規模、居住形態、祖父母との同居や行き来、父母の職業、収入、年齢といった項目を見た。

まず、表6のクロス表を見てみよう。まず、父母の国籍を除けば、子どもや家族の属性によって大きく回答傾向が変わるということはないということが重要である。これはつまり、子ども観とその持ち主が比較的均等に全国の各家庭に広がり共有されているということである。しかしながら、同時に、一定の傾向は読み取れる。それを見るために、残差の符号と絶対値——すなわち、全体的な傾向から逸脱した目立った傾向——に注目して見ていきたい。（表中では残差の絶対値が1.97を超えるものを太字にしてある。）

最初に子どもの性別を見ると、男の子にはより積極性を望みやすく、女の子には調整的態度を望みやすいという傾向が明らかに見て取れる。さらに、回答者が父親の場合は積極的な子どもを望みやすく、母親の場合には調整的態度を望みやすいということも確認できる（ただし、父親のみが回答したケースは全体の6.1%にすぎない）。子ども観そのものが、二重の意味でジェンダーに規定されていることが確認できて興味深い。

きょうだいを見ると、多胎児の場合は、3つ子になると身の回りのものを素直に大切にす
る心性を表す「感性×調整」となる率が高くなる。兄弟がいる場合（第1回調査時点で他のきょうだいがいる場合）は「知性」をより選択しやすく、いない場合は「感性」を選択しやすくなり、当該設問のある第3回調査時までには弟妹がいる場合（厳密には、第1回から第3回できょうだい数が増えている場合を「弟妹あり」と見なした）は「感性×調整」の回答率が上がる。すなわち、きょうだいの順位ないしは他のきょうだいがいるという事実そのものによって、保育者が期待する子ども観に差異があるということだろうか。もしかすると、他のきょうだいの年齢によって、対象となっている子どもに対する思いも代わってくるということかもしれない。つまり、兄弟がいる場合は、より知性が要求される年齢であるため、それに影響された回答をするという可能性がありうる。

祖父母との関係性を見ると、第3回調査時にいずれかの祖父母と同居している場合は「知性×調整」という子ども観を持ちやすく、「感性×積極」を持ちにくい。同居していない場合はその逆である。第2回調査で祖父母との行き来を尋ねているが、そこではおおまかに、行き来が頻繁であるほど調整を志向する率が上がり、行き来が少ないほど積極性を志向する率が上がるという傾向が確認できる。祖父母との関係性が密であるほど、伝統的な子ども観（調整型）、さらには規律を要求する子ども観（知性×調整）を持ちがちになるということが確認できる。

都市規模（市郡コード）を見ると13都市では「感性×積極」の率が高くなり「知性×調整」が低くなる、郡部ではその逆である。また、住居形態では、一戸建ては郡部と同様の傾向、集合住宅は13都市と同様の傾向が見られるが、郡部には一戸建てが多く、13都市には集合住宅が多いという事情が関係していると考えられる。いずれにしても、一般に保守的な土地柄と推測される郡部で「知性×調整」が増加し、都市部で「感性×積極」が増加するという傾向は、祖父母との関係性とも共通するところがある。

父母の属性に視点を移せば、まず、父母の国籍によってかなり子ども観に違いが見られる。興味深いのは、中国籍の場合の「知性×積極」の高さなどである。しかしながら、父母の国籍が日本でないケースの全体に占める割合は、第1回調査時点で父1.1%、母1.6%と非常に少ない。

父母の就労状況別に見てみる。第3回での当該項目への回答に影響を与えると考えられる第3回調査時以前の就労状況を確認した。まず、父親の就業状況に関しては、出産1年前および第1回調査では有意でなく、第2回調査は5%水準で有意ながらも、常勤で「知性×積極」が多い以外は、残差もわずかで大きな差異が見られなかったため、表6からは割

愛した。母親の職業に関しては、出産1年前、第1回調査時、第2回調査時とも、主婦層で「感性×調整」が選ばれやすく「積極」性は選ばれにくい、常勤層では「感性×積極」が選ばれやすく「調整」が選ばれにくいなどの傾向が見受けられる。戦前期の研究などでは都市中間層のサラリーマン・専業主婦家庭が童心主義の担い手であったと指摘されることが少なくないが、現代では女性が働くことも多いため、童心主義的な「感性」重視を共有し、主婦層が「調整」志向、常勤層が「積極」志向と分化しているのであろう。

第3回調査では、就業状況ではなく職種を聞いているが、父親の職種では、専門・技術職や管理職などの上位層で「積極」志向が見られ、逆に、運輸・通信職や生産工程・労務職などでは「知性×調整」を選びやすく「積極」性を選びにくいという傾向が見られた。また、販売職やサービス職では「知性×積極」の選択率が低い。全体としては、職業威信の高い職種の父親ほど「積極」性を好みやすく、職業威信の低い父親ほど「積極」性を好みにくいという傾向が見てとれる。母親の職種では、このようなわかりやすい傾向は見られないが、それでも、(詳細は表6を参照いただきたいが) 専門・技術職では「積極」志向が高めで「調整」志向が低め、「生産工程・労務職」では「知性×調整」の選択率が高めなど、男性と同等の傾向が見られる。

父母の年齢(第1回時の情報を元に、第3回時点のものを算出⁷⁾)では、父親では40歳ごろに転換点が見られる。30代前半には、「感性×調整」が選ばれやすく、「知性×積極」が選ばれにくい、40代を境に、「知性×積極」が率が上がり「調整」志向が低めとなる。母親の場合、30代後半で似たような転換が見られる。20代や40代後半はそれとはまた異なった傾向が見られるが、これらはケースが少ないということには留意が必要である。

父母の学歴を見ると、父母ともケースの少ない中卒、中卒後の専修・専門学校を除くと、高卒か高等教育卒かに明らかな差異がある。すなわち、ともに、高卒では「調整」志向が高くなりやすく、高等教育卒では「積極」志向が高くなりやすい。

次に、表7の平均の差の分散分析を見てみよう。子どもの成長状況(身長体重)と父母の就労収入と子ども観の4分類の関係を見たのが、表6の分散分析である。成長状況に関しては、「感性×調整」に比べて「知性×積極」ないし「感性×積極」を選んでいるほうが子どもの平均身長が高く、「感性×調整」に比べて「知性×積極」を選んでいるほうが子どもの平均体重が重い。すなわち、同年齢の子どもに比べて成長が早い子どもの親ほど、「積極」志向、中でも「知性×積極」志向となりやすいと考えられる。

また、夫婦の就労収入においては、収入が高いほうが「積極」を選びやすく、収入が低いと「調整」を選びやすいという関係性が読み取れる。(「知性×積極」と「感性×積極」の間、「知性×調整」と「感性×調整」の間には差異は見られない。)

⁷ ただし、その間に離再婚があったケースはここでは問えない。

表6 子ども観の4分類と回答者の属性(クロス表)

		子ども観				
		知性× 調整	知性× 積極	感性× 積極	感性× 調整	
性別別の	男	25.1%	23.7%	26.3%	24.9%	***
		-7.1	5.3	5.6	-3.6	
	女	28.1%	21.5%	24.0%	26.4%	
		7.1	-5.3	-5.6	3.6	
第3回回答者の組合せ	母のみ回答	26.7%	22.3%	25.1%	25.9%	***
		2.3	-4.9	-2.1	4.4	
	父のみ回答	23.2%	26.2%	28.3%	22.2%	
		-4.0	4.6	3.8	-4.1	
	父母のみ回答	26.9%	22.6%	25.3%	25.3%	
		0.2	0.0	0.0	-0.2	
単・多胎の別	単胎	26.6%	22.6%	25.2%	25.6%	**
		-0.3	0.6	-0.6	0.4	
	双子	27.4%	21.5%	26.6%	24.4%	
	0.6	-0.7	0.9	-0.8		
	3つ子	11.5%	30.8%	11.5%	46.2%	
		-1.7	1.0	-1.6	2.4	
無兄弟の第1回	兄弟なし	23.9%	21.6%	27.7%	26.8%	***
		-12.3	-5.2	11.7	5.8	
無兄弟の第3回	兄弟あり	29.2%	23.7%	22.8%	24.4%	
		12.3	5.2	-11.7	-5.8	
同居の祖父母との第3回	第妹なし	26.7%	22.8%	25.2%	25.3%	*
		1.7	1.5	-0.1	-3.1	
	第妹あり	25.9%	22.0%	25.2%	26.9%	
		-1.7	-1.5	0.1	3.1	
同居の祖父母との第3回	同居なし	26.0%	22.7%	25.7%	25.6%	***
		-4.8	0.4	4.2	0.2	
	同居あり	28.4%	22.5%	23.6%	25.5%	
		4.8	-0.4	-4.2	-0.2	
祖父母との行き来第2回	両方の祖父母と同居	35.3%	11.8%	11.8%	41.2%	***
		0.8	-1.1	-1.3	1.5	
	母方の祖父母と同居	27.3%	24.0%	24.0%	24.8%	
		0.9	1.9	-1.6	-1.1	
	父方の祖父母と同居	28.6%	22.6%	23.4%	25.3%	
		4.2	0.1	-3.7	-0.6	
	両方の祖父母とほとんど毎日・週に2	27.5%	19.8%	24.2%	28.4%	
		0.9	-2.6	-0.9	2.6	
	母方の祖父母とほとんど毎日・週に2	27.5%	21.0%	24.4%	27.1%	
		2.2	-3.8	-2.0	3.4	
	父方の祖父母とほとんど毎日・週に2	26.5%	21.6%	26.2%	25.7%	
		0.0	-1.4	1.3	0.0	
	両方の祖父母と月に1~3回	25.2%	21.1%	27.0%	26.7%	
		-2.7	-3.1	3.6	2.2	
	母方の祖父母と月に1~3回	25.5%	23.5%	25.6%	25.5%	
		-1.7	1.5	0.6	-0.3	
父方の祖父母と月に1~3回	24.6%	25.7%	25.9%	23.7%		
	-2.3	3.9	0.8	-2.3		
両方の祖父母と数回	23.9%	24.4%	27.4%	24.4%		
	-4.0	2.8	3.2	-1.8		
母方の祖父母と数回	27.7%	26.7%	24.7%	20.9%		
	0.6	2.2	-0.3	-2.4		
父方の祖父母と数回	27.1%	25.5%	23.1%	24.3%		
	0.2	1.1	-0.8	-0.5		
行き来しなかった・いない・不詳	29.7%	24.4%	24.3%	21.6%		
	2.2	1.4	-0.7	-3.0		
全部不詳	25.8%	26.8%	24.8%	22.5%		
	-0.4	2.5	-0.2	-1.8		

		子ども観					
		知性× 調整	知性× 積極	感性× 積極	感性× 調整		
市郡コード第3回	13大都市	25.0%	23.2%	26.6%	25.3%	***	
		-4.0	1.5	3.4	-0.8		
	その他の市	26.7%	22.5%	25.1%	25.8%		
		0.5	-0.8	-0.7	0.9		
住居形態第2回	郡部	28.2%	22.3%	24.0%	25.5%		
		3.7	-0.7	-2.8	-0.3		
	外国	19.1%	32.4%	26.5%	22.1%		
		-1.4	1.9	0.2	-0.7		
父の国籍	一戸建て	27.5%	22.5%	24.3%	25.6%	***	
		4.6	-0.4	-4.2	0.0		
	集合住宅(アパート・マンション)	25.5%	22.6%	26.1%	25.7%		
		-4.6	0.1	4.3	0.3		
	不詳	27.8%	27.8%	24.4%	20.0%		
		0.4	1.8	-0.3	-1.8		
	母の国籍	日本	26.6%	22.5%	25.2%	25.7%	***
			2.3	-5.7	-0.2	3.3	
		韓国・朝鮮	25.8%	22.6%	28.9%	22.6%	
			-0.2	0.0	1.1	-0.9	
		中国	16.0%	60.0%	12.0%	12.0%	
			-2.1	7.8	-2.6	-2.7	
		フィリピン	0.0%	50.0%	25.0%	25.0%	
			-1.2	1.3	0.0	0.0	
		タイ	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	
			0.8	0.9	-0.8	-0.8	
米国		17.6%	41.2%	26.5%	14.7%		
		-1.2	2.6	0.2	-1.5		
英国		40.0%	0.0%	60.0%	0.0%		
		0.7	-1.2	1.8	-1.3		
ブラジル		12.5%	37.5%	25.0%	25.0%		
		-0.9	1.0	0.0	0.0		
ペルー	0.0%	57.1%	28.6%	14.3%			
	-1.6	2.2	0.2	-0.7			
その他の国	20.0%	32.3%	30.8%	16.9%			
	-1.2	1.9	1.0	-1.6			
母の国籍	日本	26.5%	22.5%	25.3%	25.7%	***	
		-1.1	-6.2	2.4	4.6		
	韓国・朝鮮	28.6%	22.9%	28.0%	20.6%		
		0.6	0.1	0.9	-1.5		
	中国	24.3%	48.1%	17.3%	10.3%		
		-0.7	8.3	-2.5	-4.8		
	フィリピン	39.2%	24.0%	17.6%	19.2%		
		3.2	0.4	-2.0	-1.6		
	タイ	29.2%	29.2%	4.2%	37.5%		
		0.3	0.8	-2.4	1.3		
米国	33.3%	16.7%	33.3%	16.7%			
	0.4	-0.3	0.5	-0.5			
英国	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%			
	-0.6	-0.5	1.7	-0.6			
ブラジル	20.0%	40.0%	20.0%	20.0%			
	-0.5	1.3	-0.4	-0.4			
ペルー	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%			
	0.3	1.8	-1.0	-1.0			
その他の国	14.7%	44.1%	23.5%	17.6%			
	-1.6	3.0	-0.2	-1.1			

※ *は χ^2 乗検定の結果。***<0.001 **<0.01 *<0.05

※ 下段は残差。残差が|1.97|を超えるものを太字とした。